愛知教育大学教育創造開発機構紀要　vol. 1　pp. 83 ～ 88, March, 2011

中学生の他尊感情と友人関係の諸側面との関連

柴山　香澄 *　武藤　悠子 **　五十嵐　哲也 ***

* 一宮市立今伊勢中学校　** 根室市立海星小学校　*** 養護教育講座

Relationship between Other−esteem and Friendships among Junior High School Students

Kasumi SHIBAYAMA*　Yuko MUTO**　Tetsuya IGARASHI***

*Imaise Junior High School, Ichinomiya 491-0057, Japan　**Kaisei Elementary School, Nemuro 087-0033, Japan
***Department of School Nursing and Health Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要　　約

「自分以外の他者を尊敬し、価値ある人間であると考える肯定的態度」である他尊感情について、中学生の現状を探った。また、その他尊感情と友人に対する感情、友人適応がどのように関連しているのかという点も検討した。その結果、中学生の他尊感情はいくつかの側面が削除されたものであり、かつ多くの者が高程度に有する状況であった。また、友人に対する感情の「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」と、友人適応を高める作用を有していた。一方で、「ライバル意識」「葛藤」との間には、関連性が認められなかった。

Keywords：他尊感情、友人に対する感情、友人適応

Ⅰ．問題と目的

近年、中学生におけるいじめや不登校など、友人関係上の様々な問題が顕在化している背景に、自尊感情の乏しさが指摘されている。自尊感情は、Rosenberg（1965）によって「自己に対する肯定的または否定的な態度」と定義されており、精神的健康度の高さに関与すると推測されている。実際、塩見・伊達・中田・橋本（2003）は、自尊感情が高い中学生は、アサーション能力が高いことを明らかにしている。

しかし、最近になって、自尊感情を高めることが攻撃性の抑制には必ずしも繋がらないことが指摘されるようになってきた。例えば、Baumeister, Smart, & Boden（1996）は、多くの犯罪者が非常に高い自尊感情を持っていることを示唆している。また、高い自尊感情を持った人は、自分を持ち上げるために他人をたたきつぶすことに対して何の気の咎めを持たず、自分の優越や優勢を証明したり守ったりするために他人に与える害は気にしないことを明らかにしている。このことは、自分達とは異なったり劣ったりする人への軽蔑の感情があること、すなわち他者を評価し尊敬することの欠如が懸念されるべき問題である（Baumeister, 2001）と指摘されている。

このような指摘を受け、Hwang（2000）は自尊感情の過度の促進を問題とし、other-esteem の概念を提唱した。Hwang（2000）によれば、other-esteem は、「全ての人間を、尊重し、受容し、思いやり、価値のあるものとし、奨励すること」「全ての人々の平等性を受け入れるという心的態度」であると述べている。日本では、この概念に則り other-esteem を「他尊感情」と訳し、「自分以外の他者を尊敬し、価値ある人間であると考える肯定的態度」と定義されている（石川・石隈・濱口, 2005）。そして、自尊感情の促進だけでなく、他尊感情を促進する必要があるという Hwang（2000）の指摘をうけ、石川・石隈・濱口（2005）は、大学生の自己表現について、自尊感情だけでなく他尊感情の視点を取り入れた研究を行った。この研究では、自尊感情の高低に関わらず、他尊感情が低い者が攻撃的な表現を行うことが示された。また、アサーティブな表現に影響を与える個人の内的特性として、自尊感情とともに他尊感情も重要であることが明らかとなった。

以上のような研究成果を踏まえ、他尊感情育成のための教育実践も散見されるようになった。例えば、鈴木（2009）は、子どもひとりひとりが発言するたびに

「それは、偉い」「きっとできる」といった他者を認める言葉を学級全員で唱和することで、他尊感情を高めようとしている。また高橋（2009）は、グループワーク・トレーニングを通して他者を考える機会を作る取り組みを行っている。しかしながら、上述した研究ならびに教育実践においては、いずれも中学生を対象とした報告はなされていない。

中学生は、依存的で親中心であった対人関係から脱却し、友人関係を中心とした対人関係を構築・維持することが主となり、その関係性が精神的な自立へと結びつく時期である。したがって、友人を尊重するような態度、すなわち他尊感情は、中学生にとって非常に重要なものであると言えよう。

実際、中学生は多くの時間を友人と過ごし、その中で様々な感情を抱いている。また、その友人関係の適応状態が、学校生活の適応感に大きな影響を与えていることも示されている。榎本（1999）は、青年期では友人に対し「信頼･安定」、「不安･懸念」、「独立」、「ライバル意識」、「葛藤」の５つの感情を抱いていることを明らかにした。そして、中学生は特に「ライバル意識」「不安・懸念」の感情を友人に抱きやすいことが分かった。また､友人関係への適応感が高い中学生は、学校嫌い感情（古市，1991）や欠席願望（本間，2000）が低いという結果も得られている。

このように、中学生は友人に対して否定的な感情も抱きやすい。そうした中学生が、他尊感情をどのように捉えているのかを検討することは興味深い。さらに、そうした他尊感情が、具体的な友人に抱く感情とどのように関連しているのかを検討することは、他尊感情の意義を見出すためにも必要であろう。加えて、他尊感情は友人への適応感とどのような関連性を有しているのかについても、検討の余地が残されている。

したがって、本研究では、友人関係が生活の支えとなる中学生を対象として、他尊感情に注目し、他尊感情が友人関係の感情的側面と、対友人適応にどのように関連しているのかを明らかにする。この研究で、他尊感情が友人に対する複雑な感情とどのように関連し、そして実際の友人関係の適応状態にいかに関連しているのかを検討することは、中学生がよりよい学校生活を送る上で重要な指針となると考えられる。

Ⅱ　予備調査

１．方法

(1) 調査対象

臨床心理士２名（女性２名、平均年齢32.5歳、平均経験年数5.5年）、中学校教員２名（女性２名、平均年齢51.0歳、平均経験年数28.5年）、計４名を対象とした。

(2) 調査内容

大学生向けに作成された他尊感情尺度（石川･石隈･濱口，2005）の質問項目が、中学生の他尊感情を測定するものとしてふさわしいか否かを判断してもらった。各項目について､「A：このままの項目でよい」「B：改善した上で項目にすべき」「C：中学生に適切でない」のいずれかであるのか判断を求めた。なお、「B：改善した上で項目にすべき」と判断した場合には、中学生に適した文章への変更を求めた。

(3) 調査時期と手続き

2009年６月下旬に、郵送法により実施した。

２．結果と考察

全11項目のうち、対象者３名以上が「A」と判断した10項目については、修正せずに用いることとした。２名が「B」と回答した１項目については、対象者の判断を考慮して「謙虚」の意味について加筆することとした。具体的には、「ひかえめで、つつましいこと」という注釈を付け加えた。

Ⅲ　本　調　査

１．方法

(1) 調査対象

公立Ａ中学校２年生99名（男子45名､女子54名）、３年生78名（男子34名、女子44名）の合計177名を調査対象とした。

(2) 調査内容

ａ．中学生用他尊感情尺度

予備調査をもとに作成された11項目による尺度である。５件法で回答が求められた。

ｂ．向社会的行動尺度

大学生用他尊感情尺度では、その妥当性検討のために向社会的行動との関連が検討されている。そこで、本研究でも中学生用他尊感情尺度の妥当性の検討のために使用された。他尊感情が高ければ、向社会的行動は増えるのではないかと考えられる。本研究では、鈴木・小川（2007）による中学生を対象とした社会的スキル尺度の下位尺度「向社会的行動」８項目が使用された。本尺度は、高い信頼性が確認されている。４件法で回答が求められた。

ｃ．友人に対する感情尺度

本尺度は、榎本（1999）によって作成された友人関係の感情的側面を測定するものである。「友人に対する感情」とは、友人に対してどのような感情を抱いているのかという側面のことである。本尺度は、「信頼･安定」「不安・懸念」「独立」「ライバル意識」「葛藤」の５つの因子からなる合計25項目で、十分な信頼性が確認されている。６件法により回答が求められた。

Table1　中学生用他尊感情尺度の因子構造（主因子法）

α = .92	因子負荷量	共通性
私は、どんな人も生まれてきた以上は価値があると思う	.85	.72
私は、人の個性の違いを理解し、それぞれに価値があると思う	.85	.72
私は、相手とともに喜び合うことを大切にする	.83	.68
私は、誰にでもその人が一番輝ける場所があると思う	.82	.68
私は、人に対して、常に親切でいようと思う	.76	.58
私は、相手が傷つくようなことはしたくない	.75	.56
私は、人が目指している目標を応援しようと思う	.72	.52
私は、人は誰でも失敗するし、失敗することは悪いことではないと思う	.71	.51
私は、この世の中に必要でない人などいないと思う	.68	.46

d．学校での友人適応尺度

本間（2000）の尺度を用いた。本尺度は全５項目で、高い信頼性が確認されている。４件法で回答が求められた。

(3) 調査時期と手続き

2009 年 9 月初旬に、各学級単位で調査用紙が配布され、集団で実施し、回収された。回答は無記名で行われ、本調査が研究のためにのみ使用されることが教示された。

２．結果と考察

(1) 中学生用他尊感情尺度の構造と性差

中学生用他尊感情尺度の構造を確認するために、因子分析を行うこととした。因子分析に先立ち、項目分析を実施したところ、問題のある項目は認められなかった。そこで全項目による因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、共通性が .20 以下だった項目が認められた。そこで、該当する２項目「私は、他人に対して謙虚（控えめで、つつましいこと）な姿勢でいたいと思う」「私は、人間には優劣がないと思う」を削除し、再度因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。（Table 1）

固有値１以上の基準で因子を抽出し、１因子が抽出され、全９項目が .40 以上の因子負荷量を示した。よって、中学生用他尊感情尺度は単一構造であることが確認され、項目得点の総和を項目数で除すことで得点化した。

その上で、信頼性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出したところ（Table 1）、α = .92 と満足な値が得られ、十分な内的整合性が認められた。

妥当性については、向社会的行動尺度との相関係数を算出した。その結果、正の有意な中程度の相関が見られた（r = .68、p<.001）。よって、中学生用他尊感情尺度は十分な妥当性が認められたと言える。

なお、中学生用他尊感情尺度得点は、理論的には１点から５点に分布し、中央値は３点となる。しかし本研究では、平均点（± SD）は 3.94 点（± .82）であった。したがって、中学生用他尊感情尺度得点の分布は、高得点側に大きく傾斜する結果となった。

また、性別間で中学生の他尊感情に差が見られるかを検討するために、t 検定を行った。その結果（Table 2）、性別において他尊感情尺度得点に違いが見られ、女子のほうが男子よりも有意に高い値だった。

(2) 他尊感情と友人に対する感情及び友人適応との関連性について

まず、本研究における、友人に対する感情各下位尺度および友人適応の平均値、標準偏差、信頼性係数は Table 3 に示した。その上で、他尊感情が、友人に対する感情と友人適応とどのように関連しているかを明らかにするために、Pearson の積率相関係数を算出した（Table 4）。

その結果、「信頼・安定」、「不安・懸念」、「独立」については有意な結果が得られ、他尊感情はこれらの感情と弱～中程度の正の相関関係にあることが示された。

しかしながら、「ライバル意識」、「葛藤」については有意ではなく、他尊感情はこれらの感情とは関連性が認められなかった。

また、友人適応については有意な結果が得られ、他尊感情との間に中程度の正の相関関係が示された。

Ⅳ　総 合 考 察

１．中学生の他尊感情について

本研究では、９項目からなる１因子構造の中学生用他尊感情尺度が作成された。またこの尺度は、信頼性、妥当性ともに十分に満足な値を示していた。したがって、本尺度は中学生の他尊感情を測定するために、きわめて有用なものであると言うことができる。

この中学生における他尊感情について、大学生を対象とした原尺度（石川・石隈・濱口，2005）と比較してみる。先に述べた通り、本研究では、中学生用他尊感情尺度得点の平均値は 3.94 点であり、大学生用他尊感情尺度（石川・石隈・濱口，2005）より相対的に高い得点であると考えられる。中学生は、cham －

Table2　他尊感情の性差

	男子（n=79）	女子（n=98）	t 値
	M（SD）	M（SD）	
他尊感情	3.63（.82）	4.19（.74）	4.76　***

Table3　友人に対する感情各下位尺度および友人適応の平均値、標準偏差、信頼性係数

	M	（SD）	α
≪友人に対する感情≫			
信頼・安定	4.00	（.96）	.90
不安・懸念	3.18	（.93）	.78
独立	3.72	（1.04）	.77
ライバル意識	2.82	（1.11）	.63
葛藤	2.67	（.90）	.63
≪友人適応≫	3.28	（.62）	.85

Table4　他尊感情と友人に対する感情および友人適応との相関分析結果

	他尊感情
≪友人に対する感情≫	
信頼・安定	.56　***
不安・懸念	.27　***
独立	.32　***
ライバル意識	-.01
葛藤	-.03
≪友人適応≫	.51　***

*** $p < .001$

group（内面的な互いの類似性を確認する一体感や凝集性を特徴とする集団）を形成する時期にあたり、同調的な友人関係を特徴とする時期である（石本･久川･齊藤･上長･則定･日潟･森口, 2009）。落合･佐藤（1996）は、中学生が友人とのつきあいの中で同調する理由として、自分の本音を見せることで仲間外れにされることを恐れ、自分の本音が問われないような行動をするからであると指摘している。先の結果も考え合わせると、中学生は同調的な行動をとることで相手を受容する姿勢を見せる傾向にあり、そうした姿勢は友人関係の発達的特徴に基づいた妥当な結果であると推察される。こうした特徴が、中学生の他尊感情が高い背景ではないだろうか。

2．他尊感情と友人に対する感情との関連性について

他尊感情は、友人に対する感情のうちの「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」と関連し、「ライバル意識」「葛藤」には関連していなかった。

「信頼・安定」とは、友人を信頼し、かつ友人との間で安定感を保った肯定的な感情である（榎本, 1999）。したがって、自分にとって価値ある存在であったり、尊敬したりしている相手に信頼感を抱くのは当然であり、他尊感情が「信頼・安定」と正の相関関係にあるのは理解できる。

一方で、他尊感情が高いと「不安・懸念」も高くなるという結果が導き出された。榎本（1999）は、「不安･懸念」は他人に肯定的受容を望むがゆえに不安を感じる感情であると述べている。そして、自己と他者とが結びついているという観点で、ある特定の他者との協調的な関係を持ちたいと考え、その関係が持てるかどうかを意識することから生じる不安であると考察している。藤井（2001）は、現代青年の友人関係について、「近づきたいが近づきすぎたくない」「離れたいが離れすぎたくない」といった、自己内でのジレンマ（山アラシ・ジレンマ）を抱えていることを明らかにした。このようなジレンマは、相手との関係性を意識するがゆえに生じるものであると推察され、親しくなりたい、嫌われたくないという感情が背景にあるとも考えられる。以上より、他尊感情が山アラシ・ジレンマを引き起こす要因となり、友人に対しての「不安・懸念」を

高めるひとつの要因となったのではないだろうか。

また、他尊感情が高いと、「独立」が高いという結果が認められた。榎本（1999）によると、「独立」は、友人に対して自分の意見をしっかり伝えたり、自分の意志で行動する感情である。友人への「独立」感情は、互いに認め合うことを望む「相互尊重欲求」に関わっており、さらに、「相互尊重欲求」は、互いの相違点を認め合う活動である「相互理解活動」に関連している（榎本，2000）。そして、菊池（1988）は他尊感情の一側面である共感性について、自分と他人とが違った考え方を持ち、違った感じ方をするということが前提となって成り立つものであると述べている。友人に自分の意見をきちんと伝えたり、自分の意志で行動したりと感じることが、自分と相手に違いがあることを知り、相違点を知ることで相手を尊重し、相手を認めることに繋がると言えよう。これらを踏まえると、他尊感情が「独立」を高めるという本研究の結果は、妥当なものであると考えられる。

しかし、他尊感情と「ライバル意識」、他尊感情と「葛藤」は互いに関連していないことが本研究で明らかになった。「ライバル意識」は、友人に対して負けたくない感情である（榎本，1999）。また、「葛藤」は、友人に自分のやりたいことや思っていることを伝えられず、友人との間で自分が確立していないという、友人に左右されてしまう感情である（榎本，1999）。他尊感情と「ライバル意識」について関連が見られなかった理由として、相手を尊敬する気持ちが強いが故に友人に対して勝ち負けにこだわらなくなる者と、逆に、相手を尊敬し価値があると認めているが故に友人に勝ちたいと思う者が存在するのではないかと推測する。一方、他尊感情と「葛藤」に影響が見られなかった理由として、尊敬する相手であるからこそ自分のやりたいことや思っていることをうまく伝えられる者と、尊敬する相手であるからこそ、その友人の意見に左右されてしまう者の双方が存在するのではないかと推測される。これらの結果が混在しているのであれば、本研究のように影響関係が生じなかったのは理解できる。この点の詳細に関しては、今後の課題として残される。

3．他尊感情と友人適応との関連性について

大山（2003）は、中学生の共感性と日常生活適応感（学校適応感・家庭適応感・家族適応感・友達適応感・対教師適応感）の間に相関があり、日常生活適応感の得点が高いほど、共感性得点が高いことを明らかにしている。他尊感情に類似する概念である共感性の高さが友人適応を高めているというこの研究結果からも、他者に対して尊敬の念を抱いたり認めたりすることが、友人と良い関係を作る上で重要であることが改めて示された。

4．今後の課題

本研究には、いくつかの検討課題が残されている。1つめは、作成した中学生用他尊感情尺度が、項目数の減少により、石川・石隈・濱口（2005）の指摘する他尊感情の7つの側面全てを包括するものではなくなったことである。これは、項目に中学生に理解しがたい単語が含まれていたことも要因として推測される。よって、中学生が理解できる語句に言い換える等の工夫が必要であろう。

2つめに、他尊感情の発達的変化を検討することである。本研究の結果からは、大学生よりも中学生のほうが他尊感情が高いということが推測された。しかし、類似概念である共感性（荒木・松尾，1992）や、愛他行動（松井，1991）は、年齢とともに上昇するという知見が多い。他尊感情について様々な年代層との比較検討を行うことで、このような違いがなぜ生じるのかということや、他尊感情に影響を与える要因など、さらなる知見が得られるであろう。

3つめは、他尊感情だけでなく、自尊感情も併せて検討を行うことである。石川・石隈・濱口（2005）は、自尊感情と他尊感情のバランスが崩れているために、不適応な行動が表出される可能性を指摘している。また、上村（2007）は、自己受容と他者受容がバランスよく共存していることが、より適応的で成熟した状態であることを明らかにしている。自尊感情と併せて検討を行うことで、他尊感情からの影響との違いを見出し、中学生の友人関係がどのような形をして成り立っているかを理解することにつながると考えられる。

本研究で、中学生がよりよい学校生活を送るためには、他尊感情を高めることが重要であることが示唆された。自尊感情を高める取り組みはこれまでも行われてきたが、それに加えて他尊感情を高める取り組みも望まれる。今後、教育実践や縦断的研究を通して、どのような取り組みをすれば他尊感情を高めることができるのかを明らかにする必要がある。

引　用　文　献

荒木紀幸・松尾廣文　1992　中学生版社会的視点取得検査の開発　兵庫教育大学研究紀要，12, 63-86.

Baumeister, R.F. , Smart, L., & Boden, J.M. 1996 Relation of threatened egoism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review,* 103, 5-33.

Baumeister, R.F 2001 Violent Pride. *Scienttific American*, 284, 96-101.

榎本淳子　1999　青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，47, 180-190.

榎本淳子　2000　青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連　教育心理学研究，48, 444-453,

藤井恭子　2001　青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析　教育心理学研究，49, 146-155.

古市裕一　1991　小中学生の学校嫌い感情とその規定因　カウ

ンセリング研究，24, 123-127.
本間友巳　2000　中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究，48, 32-41.
Hwang, P. O.　2000　*Other esteem: Meaningful life in a multicultural society.* Philadelphia: Accelerated Development.
石川満佐育・石隈利紀・濱口佳和　2005　他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響　筑波大学心理学研究，29, 89-97.
石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平　2009　青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連　発達心理学研究，20, 125-133.
菊池彰夫　1988　思いやりを科学する－向社会的行動の心理とスキル　川島書店
松井洋　1991　青年期における愛他行動の発達とその規定因　川村学園女子大学研究紀要，2, 181-193.
落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友人との付き合い方の発達的変化　教育心理学研究，44, 55-65.
大山智子　2003　中学生における共感性尺度の検討と日常生活適応感との関連　昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要，12・13, 1-7.
Rosenberg，M.J. 1965 *Society and adolescent self-image.* Princeton: University Press.
塩見邦雄・伊達美和・中田栄・橋本秀美　2003　中学生のアサーションについての研究－自尊感情との関連を中心にして－兵庫教育大学研究紀要第１分冊学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育，23, 69-80.
鈴木教夫　2009　自尊感情・他尊感情を育てる：ほめ言葉のプレゼント―アサーション・トレーニングの活用　児童心理，903, 99-105.
鈴木真吾・小川俊樹　2007　自尊心と被受容感による思春期の適応理解の検討：社会的スキルとの関連から　筑波大学心理学研究，34, 91-99.
高橋あつ子　2009　自尊感情・他尊感情を育てる「わたしはステキ」と思える体験とその日常化―学校グループワーク・トレーニング　児童心理，903, 106-112.
上村有平　2007　青年期後期における自己受容と他者受容の関連：個人志向性・社会志向性を指標として　発達心理学研究，18, 132-138.

謝　　辞

本研究は、第一筆者と第二筆者が共同研究を行い、第三筆者が指導した平成21年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を、加筆・修正したものです。実施にあたり、調査に快くご協力いただきました中学生の皆様、ならびに教職員の皆様、臨床心理士の皆様に心より感謝申し上げます。